

高岡市埋蔵文化財調査概報第7冊

八丁道遺跡調査概報 I

—八丁道歴史的景観整備事業に伴う昭和62年度の調査—

1988年3月

高岡市教育委員会

高岡市埋蔵文化財調査概報第7冊

八丁道遺跡調査概報 I

—八丁道歴史的景観整備事業に伴う昭和62年度の調査—

1988年3月

高岡市教育委員会

序

正保2年（1645年），高岡開町の祖，加賀藩2代藩主前田利長の33回忌を翌年に控え，その菩提寺である瑞龍寺は，東面する七重伽藍をもつ「伽藍瑞龍寺」への改造に着手された。元正保3年，前田利長の廟所（前田墓所）が東方約1km離れた地点に造営された。この瑞龍寺と墓所を結ぶ直線の参道が「八丁道」である。

瑞龍寺・八丁道・前田墓所は高岡城の南側に位置し，寺院・参道・廻所でありながら，軍事的防衛線としての機能が付与されていたと言われる。また，往時の史料からは，八丁道の両側には一町毎に石燈籠が立ち並んでいたことが記され，この中の一つ『真龍院君御道の記』には、「道の程左右に松の並木陰しけり石の燈籠立つらねたるなと物さひたり」と記されている。著者真龍院が，天保8年（1837年）に瑞龍寺や繁久寺に参詣した時のことである。

高岡市では，この山緒ある道筋であり，広く市民に親しまれてきた八丁道の景観形成を整えることを目的に，昭和61年度より八丁道歴史的景観整備事業に着手することになりました。これに伴い旧八丁道の内容確認のための発掘調査を実施いたしました。

此度の調査は，昭和62年度の工事実施範囲，瑞龍寺前から，下関・京田線まで約220mを対象とし，数箇所でトレンチを設定して実施いたしました。

最後に，調査に際し御指導・御援助いただきました富山県教育委員会文化課，富山県埋蔵文化財センターをはじめ，御協力いただきました地元の皆様，関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和63年3月31日

高岡市教育委員会

教育長 竹下 外男

例　　書

1. 本書は，高岡市建設部道路課による八丁道歴史的景観整備事業に伴う，八丁道遺跡（即八丁道）の調査の概要報告書である。
2. 当調査は，高岡市建設部道路課の委託を受けて，高岡市教育委員会が実施した。
3. 調査地区は，富山県高岡市駅南4丁目及び東上間に所在する。調査期間は，昭和62年7月20日から24日までと9月7日から11日までである。
4. 当調査は，富山県埋蔵文化財センター主任岸本雅敏氏・斎藤隆氏，同文化財保護主事久々忠義氏の指導を受け，高岡市教育委員会社会教育課文化係文化財保護主事山口辰一が担当した。
5. 調査事務は，高岡市教育委員会社会教育課文化係長河合基郎，同主任片折正明が担当し，教育委員会参事・社会教育課長熊本史郎が總括をした。
6. 本書は，岸本・斎藤・久々氏の指導により，山口がまとめた。

目 次

序

例 説

目次

I 序 説	1
1. 遺跡概観	1
2. 調査経過	3
II 調査の概要	5
1. 各調査地点の設定	5
2. 第1地点	6
3. 第2地点	7
4. 第3地点	9
5. 第4地点	9
III 結 語	10

調査参加者名簿

発掘

上田順子、越前為子、奥村利雄、笠島庄蔵、角村勇吉、藏野広義、後藤誠二、島田英子、島田文子、竹内清吉、津田安次郎、船木悦子、宮下真知子、盛野弘、吉沢克則、吉久恵子

整理

上田順子、小熊冷子、工幸子、新田貢子、船木悦子、松井弘子、宮下真知子、向しみ子

図 版 目 次

- | | | | |
|---------|--------------------|---------|---------------------|
| 図版 1 遺構 | 1. 第1地点全景 (南西) | 図版 5 遺構 | 1. 第3地点全景 (北西) |
| | 2. 第1地点余景 (南) | | 2. 第3地点北側石垣近景 (北東) |
| 図版 2 遺構 | 1. 第1地点南側石垣近景 (北) | 図版 6 遺構 | 1. 第4地点全景 (西) |
| | 2. 第1地点南側石垣近景 (北東) | | 2. 第4地点北側石垣全景 (北東) |
| 図版 3 遺構 | 1. 第2地点全景 (北西) | 図版 7 遺構 | 1. 第4地点北側石垣全景 (北西) |
| | 2. 第2地点北側石垣近景 (北東) | | 2. 第4地点北側石垣部分近景 (北) |
| 図版 4 遺構 | 1. 第2地点余景 (南) | 図版 8 遺物 | 1. 七器・陶磁器 |
| | 2. 第2地点南側石垣近景 (北東) | | 2. 瓦 |

挿 図 目 次

- | | | | |
|---------------------------|---|------------------------------|----|
| 第1図 遺跡位置図(1)(1/5万)..... | 1 | 第6図 調査地点配置図(1/2,000)..... | 6 |
| 第2図 遺跡位置図(2)(1/1万)..... | 2 | 第7図 菊瓦実測図(1/2)..... | 7 |
| 第3図 調査地区位置図(1/5,000)..... | 3 | 第8図 上層断面図(1/80)..... | 8 |
| 第4図 調査風景..... | 4 | 第9図 旧八丁道横断面概念図(1/200)..... | 10 |
| 第5図 調査地区余景..... | 5 | 第10図 旧八丁道平面概念図(1/2,000)..... | 11 |

I 序 説

1. 遺跡概觀

八丁道（はっちょうみち）は、加賀藩2代藩主前田利長の菩提寺である瑞龍寺とその廟所である前田利長墓所（以下「前田墓所」と称する）とを直線で結ぶ参道である。長さが約8町（約870m）あるところから八丁道と呼ばれている。

前田利長は1609年（慶長14年）に高岡城を築くと共にその城下町を開いた。1613年（慶長18年）、庄山惣四郎は、この城の南西約1.8kmの地点に、法（宝）円寺を開き、翌年前田利長が死去した折に、その法名をとって瑞龍寺と改名した。その後、1615年（元和元年）に「一国一城の令」により、



第1回 通路位置図(1)(1/5万)



第2図 遺跡位置図(2)(1/1万)

高岡城は廢城を余儀なくされたが、高岡の町は商工業の町として存続された。1645年(正保2年)、前田利長の33回忌を翌年に控え、加賀3代藩主前田利常は、瑞龍寺の改造を企図し、ここに今日も壮大な伽藍を誇る瑞龍寺が起工されるに至った。これと共に東北東約1kmの地点に、前田利長の廬所が1646年(正保3年)に造営され、これを結ぶ参道としての八丁道も築造されることになった。

現在の瑞龍寺は、仏殿・法堂を中心に曹洞宗の典型的な伽藍を伝えている。かつては、二重の堀で囲まれた3万3千坪余りの寺域を誇っていた。一方前田墓所も二重の堀で囲まれた5万坪を占める広大なものであり、往来に面した側には堅固な石垣を築いたといわれている。これらを結ぶ八丁道も、南面あるいは両面を石垣で固めたとされている。高岡城は廢城となったが、濠壁は原形のまま残されており、瑞龍寺と前田墓所を防衛拠点とし、八丁道がこれを結んで南側の大防壁となっていたとの解釈もされている。

江戸時代の諸史料からは、八丁道の両脇は、松並木となり、石燈籠が立てられていたことが窺われる。石燈籠が一町毎左右に立てられていたと伝える史料もあり、この石燈籠については、前田墓所内のものを含めて58基とする記録が多い。

明治8年、樹木が伐採され、それによっていつの間にか道幅も狭くなり、石燈籠も次第に粉失していく。大正2年、古城公園(高岡城)や桜馬場公園の整備と共に、八丁道も整備され、塙盆櫻・八重桜の苗木が植えられた。そして道幅は狭いが春になると桜が生い茂る散策道となり、多くの人々に樂しまれる道となつた。

その後、各種の整備事業が行われ、現在、幅員19mで植樹帯には松・桜が交互に生い繁げる道として整備はされている。

2. 調査経過

近年、その都市のもつ固有の文化、歴史を生かした街づくりや、うるおいと快適性をもたらした都市景観の創出が強く求められている。本市においても、うるおいのある生活環境の創出を総合計画の重点施策に掲げ、魅力ある都市景観づくりに取り組んでいるところである。

八丁道は、歴史性もあり、由緒ある道すじであることから、その景観形成には大きな関心が寄せられている。しかし、八丁道の所在するJR高岡駅南側地区の環境の変化は著しく、八丁道の名にふさわしい景観形成を図ることが望まれている。

このような中で、八丁道を「うるおいのある街の道すじ」として、景観形成することを目標として「八丁道歴史的景観整備事業」が計画され、実施に移されるに至った。

当初の計画では、昭和61年度に着工し、約5箇年かけて完了する内容であった。八丁道については、昭和10年代に土地改良事業が施行され、昭和20年頃に換地となっていた他、近年の駅南地区画整理事業及び南部地区画整理事業において、舗装のための土の入れ換えあるいは排水管理設置のための掘削等で、旧八丁道の遺存状態はよくないものと考えられていた。



第3図 調査地区位置図（1/5,000）

昭和61年3月、県教育委員会より、前田墓所前に当時のままの石垣があること、八丁道近辺に当時の石垣の一部と考えられる石が散在していること等により、地下に石垣をはじめ旧八丁道の遺構が存在する可能性が強く、発掘調査の必要性の指摘を受けた。県・市教育委員会、県・市関係各課による協議が行われ、八丁道整備事業に先立ち、旧八丁道の遺存状況を確認し、整備計画との調整を図る目的で、試掘調査が実施されることになった。

この調査は、県埋蔵文化財センターにより、昭和62年5月7日から15日まで7日間実施された。調査地点は、前田墓所前2箇所の約15m²と瑞龍寺付近、さくら保育園北側1箇所の約35m²である。この結果、それなりの遺構は検出され



第4図 調査風景

たが、範囲等が不足しており、追加調査の必要が生じた。その後、市教育委員会主体による、発掘調査を行うと言う協議がまとまり、県教育委員会・県埋蔵文化財センターの指導・協力を得て実施することになった。

II 調査の概要

1. 各調査地点の設定

古絵図によれば、八丁道には用水・小河川が5・6条流れている状態となっている。また、内1条は瑞龍寺の外堀にかかるものとも受け取れるものとなっている。その中で、明和(1764年～1772年)、安永(1772年～1781年)年間作製とされる「高岡中古之図」によれば、瑞龍寺前も含め5箇所に石橋状のものが確認し得る。一方、かって用水にかかっていたとされる花崗岩製の石板が、工事の時壊され現在瑞龍寺境内に残されている。古絵図に描かれた用水の内、一つは現在の四ヶ用水となっており、その他のものも、古絵図、近年の地図、現況と比較して、用水の場所を想定してみた。

調査地点の設定に当たっては、この用水の位置に配意した。4地点設定したが、各地点設定の意図は次のようなものである。第1地点—工事予定地の西端部で瑞龍寺前である。八丁道の西端



第5図 調査地区全景

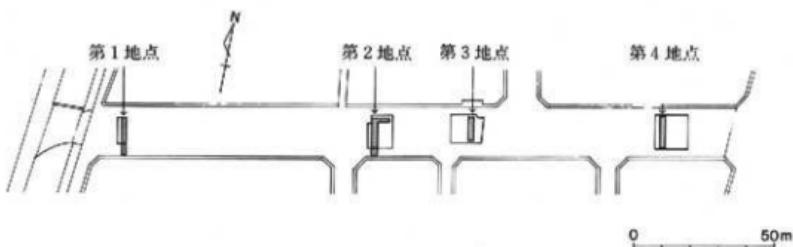
部の状態を調査することを目的とする。第2地点—さくら保育園北側である。道路の北端部が県教育委員会により試掘調査されたので、それに接続する形でトレーニングを設定し、試掘調査の成果を生かすことを意図し道路面と幅の解明を目的とした。第3・4地点—両地点とも用水の推定地である。用水とその肩部の検出を目指した。

2. 第1地点

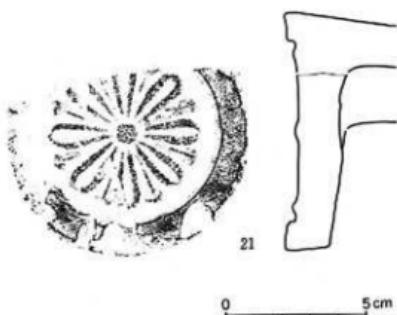
第1次と第2次の2回に分けて調査を行った。歩道部分の第1次調査は、25m²（幅約10m、長さ約2.5m）を発掘の対象とし、盛り土部分を除去した。この内、基盤層下までの掘り下げ部分は15m²である。側道部分の第2次調査は、6m²（幅約4m、長さ約1.5m）を対象として掘り下げた。

第1次調査 現在の路面下の最新の盛土層（第1層）を約50cm除去すると、旧造成土と考えられる灰色砂質土層（第2層）が確認された。その下は、第3層—ブロック混りの灰黒色粘質土層、約16~32cm、第4層—黒色粘質土層、約8~32cm、第5層—基盤の青灰色粘土層へと続いた。第3層と第4層の間には、酸化鉄分を含む灰褐色土層（第3'層）が約5~20cm見られた。北側は古い土層を掘削する形で第1層が堆積しており、第2層と第3層ではなく、第4層に直に接するものであった。この北端部より、桐木と拳大の石が検出された。これは、石垣の基礎部分である。第4層は他の調査地点よりやや厚く堆積していた。これを取り除くと、基盤層を幾分掘り込む形で、溝ないし自然の凹みが1条検出された。幅55~60cm、深さ15cmを計る。

第2次調査 第1次調査に南接する部分である。第1次調査北端部で検出された石垣の基礎部分に対応する、南側石垣が検出された。桐木とその上に載る人頭大的河原石、裏込めの小石より成るものである。この石垣に外接して、径約70cmのヒューム管が埋め込んでおり、南側はこのた



第6図 調査地点配置図 (1/2,000)



第7図 菊瓦実測図(1/2)

めの擾乱となっていた。南端部下方に古い土層が残存していた。a—灰色土、b—黒色粘質土、c—灰黑色土となり、aは第2層に、cは第3層に類似しており、中央部からの流れ込みかとも考えられた。

出土遺物は、珠洲捲鉢・甕(図版8-1, 12・14)、中国産青磁(図版8-1, 15)、菊瓦(図版8-2, 21)、丸瓦(図8-2, 23)である。珠洲捲鉢12は片口の部分である。青磁は龍泉窯系の甕と考えられる小破片で、内面に文様が付く。瓦は焼し焼きされている。菊瓦21は、第7図として、実測図(拓影図)を示した。

口径8.4cm厚さ1.5cmを計る。花文は10弁で、鎬を持つ間弁が付く。

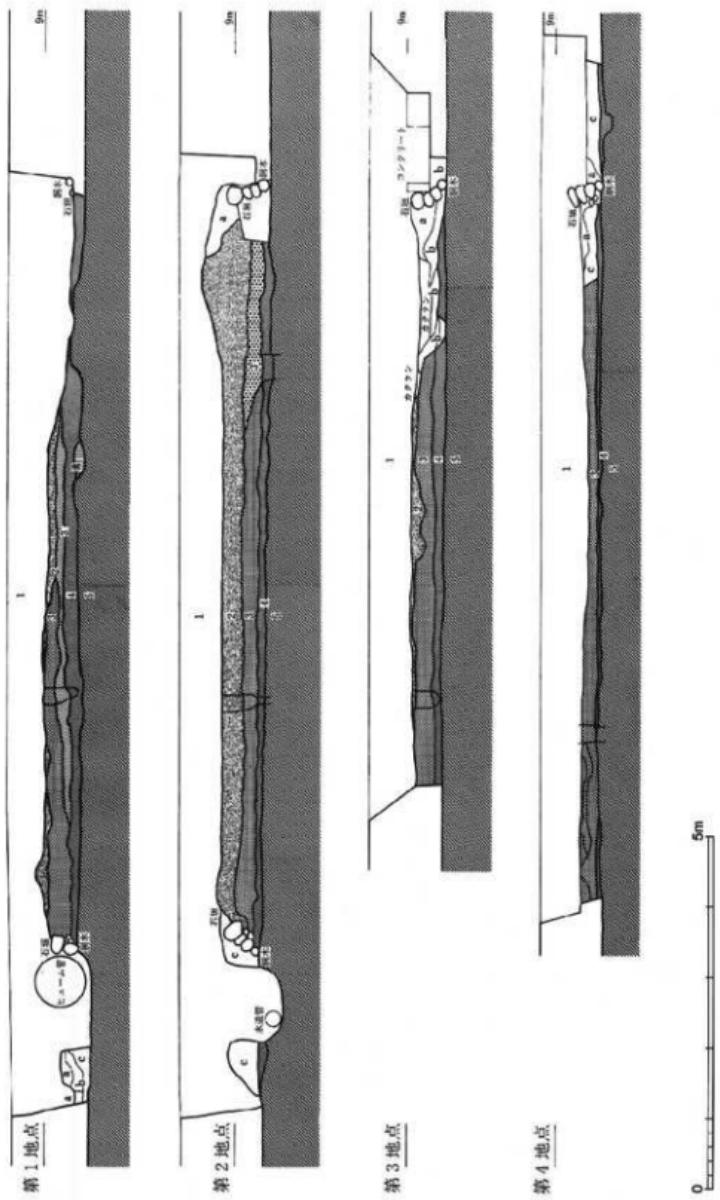
3. 第2地点

第1次と第2次の2回に分けて調査を行った。参道部分の第1次調査は、100m²(幅約12m、長さ約9m)を発掘の対象とし、盛り土部分を除去した。この内、基盤層下までの掘り下げ部分は25m²である。側道部分の第2次調査は、6m²(幅約2.8m、長さ約2.2m)を対象として掘り下げた。

第1次調査 現在の路面下は、第1層—最新の盛土層、第2層—灰色砂質土層へと続く。第1層は30~40cmを計る。バックフォーによる掘削の際、第2層を若手掘り過ぎたが、第2層は50cm前後の厚さのものである。その下は、第3層—ブロック混りの灰黑色粘質土、約18~30cm、第4層—黒色粘質土、約8~18cm、第5層—基盤の青灰色粘土層へと続く。第3層の北側はこの層に類似するが、やや黒味がかった灰黑色粘質土層(第3'層)となる。第3層が北側へ流出したものとも受け取れる。北端部からは石垣が検出された。胴木の上に人頭大の河原石を3段に積むものである。この石垣を覆う形で、a—灰褐色土が存在していた。石垣を上面において、約8mに亘り検出した。

第2次調査 第1次調査に南接する部分である。第1次調査北端部で検出された石垣に対応する、南側石垣が検出された。北側同様、胴木の上に人頭大の河原石を3段に積むものである。この石垣の外側は擾乱となり、水道管が深い位置に埋設されていた。擾乱の両側には古い土層が残り、c—灰黑色土となっていた。

第8図 土壌断面図(1/80)



出土遺物は、伊万里系磁器（図版8-1, 17）、丸瓦（図版8-2, 22）、平瓦（図版8-2, 24・26）である。伊万里17は第2層最下部から出土している。丸瓦22、平瓦24は焼し焼きされているものである。

4. 第3地点

第1次調査の1回のみの調査である。参道部分の128m²（幅約10.5m、長さ約12m）を発掘の対象とし、盛り土部分を除去した。この内、基盤層下までの掘り下げ部分は18m²である。

上層は次の通りである。第1層—最新の盛土層、約50cm、第2層—灰色砂質土層、約10~20cm、第3層—ブロック混りの灰黒色粘質土層、約15~30cm、第4層—黒色粘質土層、約8~20cm、第5層—基盤の青灰色粘土層。北側約1.8mは、第2層と第3層の純粹なものは認められず、各種の土層が複雑に混り合っていた。これらはb—黒色土を中心とするものである。北側上方はa—灰色土である。北端部からは石垣が検出された。胴木の上に人頭大の河原石を3段に積むものである。内側には裏込め用の小石が充填されていた。この石垣に外接して、近年のコンクリートブロックによる用水が走っていた。南側は掘り抜けなかったので、内容が不明である。

出土遺物は、土師器壺（図版8-1, 11）、珠洲壺（図版8-1, 13）、天目（図版8-1, 16）、伊万里系磁器（図版8-1, 18）、平瓦（図版8-2, 25）、及び土師器の小破片が数点である。珠洲壺13は、肩部片で横目波状文が付いている。

5. 第4地点

第2次調査の1回のみの調査である。参道部分の138m²（幅約12m、長さ約11.5m）を発掘の対象とし、盛り土部分を除去した。この内、基盤層下までの掘り下げ部分は18m²である。

現在の路面上の最新の盛土層（第1層）を約60cm除土すると、第2層—灰色砂質土は存在しなく、第3層—ブロック混りの灰黒色粘質土へと続くものであった。これは約12~28cmを計る。この下は、第4層—黒色粘質土、約6~8cm、第5層基盤の青灰色粘土層となる。第3層は南端部約1m余りにおいて、土層がやや乱れていた。北端部からは石垣が検出された。他の調査地点と同様なものである。この石垣を11mに亘り検出した。また、掘り下げ部分においては、胴木や裏込め用小石の状態を観察できた。第3層は石垣の南側約1.2mの所で終わり、石垣の近辺は、上より、a—灰褐色土、c—灰黒色土、第4層—黒色粘質土となるものであった。この部分は酸化鉄分が多く、アシ・ヨシ等が存在したことが窺われるものとなっていた。

遺物は出土していない。

III 結 語

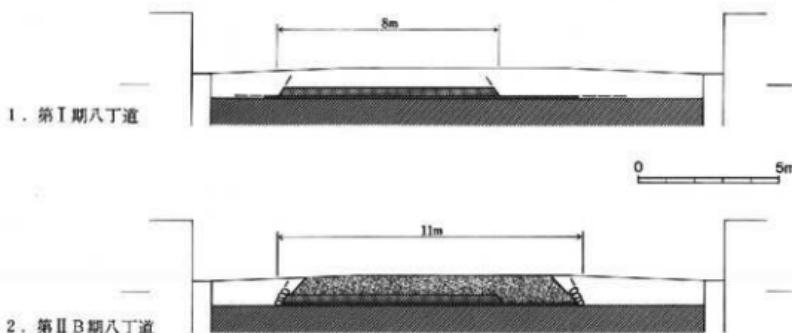
4つの調査地点の状態から判明する基本層序は以下のようになる。

1. 砂礫層
2. 灰色砂質土層
3. 灰黒色粘質土層
4. 黒色粘質土層
5. 青灰色粘質土層

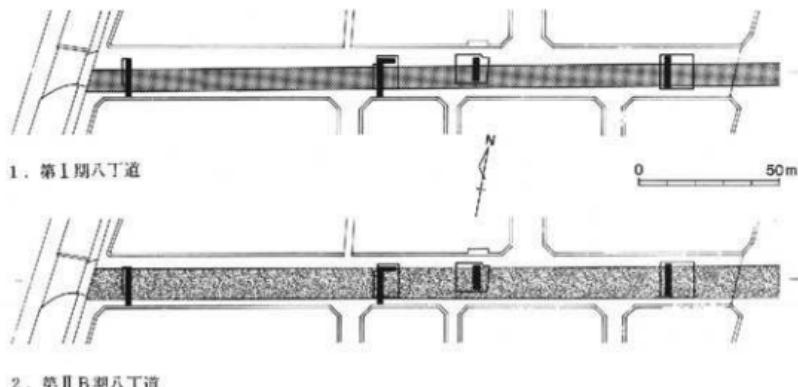
第1層は、近年における道路改修等の造成土である。発掘調査においては、この部分をバックフォーにより除去した。第2層と第3層とは、古い盛土層で、旧八丁道の造成に関わるものと判断した。第4層は、基盤層の第5層を覆い、旧八丁道の造成以前の土層と推察されたので、一応旧表土としての性格を与えておく。

県教育委員会による試掘調査の所見と同様、現在の道路面下より、2つの古い造成土が確認されたことになる。これらは旧八丁道の造成に関わるものと判断したので、下方の第3層—灰黒色粘質土による造成を第Ⅰ期八丁道とし、上方の第2層—灰色砂質土による造成を第Ⅱ期八丁道と称しておく。

第Ⅰ期八丁道は、県教育委員会による墓所前の試掘地点の成果も考慮して判断するに、下端幅8mの道路と復原し得る。路肩部分を特別に造作した事実は確認し得なかった。方向は、瑞龍寺



第9図 旧八丁道横断面概念図 (1/200)



第10図 旧八丁道平面概念図 (1/2,000)

より墓所方向を基準にすると、現八丁道と比べてやや北へ振っていたものとなつた。

第Ⅱ期八丁道は、第Ⅰ期八丁道の上に盛土し拡幅も行って造成したものと判断される。先述の通り、北側と南側より石垣が検出され、旧八丁道の変遷上において、この石垣による造成の段階を設定しなければならない理由である。第Ⅱ期八丁道の造成土とした灰色砂質土と石垣とは同時期のものと判断できない。しかしながら、全く離れた時期のもので、直接関連しないものとも断定できない。ここでは、第Ⅱ期の中にあって、路肩に石垣を施して改修をした1小期を設定する。そして、第Ⅰ期以降で、石垣以前の造成・改修の段階を第ⅡA期とし、石垣による改修の段階を第ⅡB期としておく。第ⅡB期の道路幅は石垣や胸木の存在より明確であり、下端幅11mの道路となる。なお、第ⅡA期もこれに近い幅の道路と推察できる。

第Ⅰ期については、江戸時代前期と一応想定しているが、時期を確實に特定できる所見は得られていない。第2地点において、第2層最下部より、伊万里系陶磁器の小破片(図版8-2,17)が出土していることが、次の第Ⅱ期の時期設定と共に、多少の参考にはなっている。八丁道の築造開始時期については、正保2年(1645年)を遡らないとするのが通説となっている。前田利長の33回忌を翌年に控え、瑞龍寺が東面する大御堂へと改修を受け始め、墓所の造営も開始された年である。見方を替えれば、菩提寺と墓所とを繋ぐ参道の築造も速やかに行う必要があった理由である。このように考えれば、第Ⅰ期が正保2年近くに造成されたものである可能性も十分にあり得る。

第ⅡB期の石垣による整備については、明治時代末期から大正時代初期と判断される。明治末年頃の、瑞龍寺による八丁道の買戻し、地目変更、皇太子(大正天皇)の行啓等、一連の動きの中で造成されたものとなし得る。また、大正2年に古城公園等の整備と共に、八丁道の整備も図

られたとされている。第ⅡA期については、これ以前、江戸時代末期から明治時代の造成に関するものとしておく。

以上のことをまとめると、八丁道の変遷は以下のように示せる。

第Ⅰ期；江戸時代前期、黒色粘質土層の上に灰黑色粘質土を盛って造成。

第ⅡA期；江戸時代末期から明治時代、北側へ拡幅、灰色砂質土を盛って造成。

第ⅡB期；明治時代末期から大正時代初期、道路の両側を石垣で改修。

第Ⅲ期；昭和時代＝戦後、砂礫土を盛って造成。

参考文献

青木北海 1932 「越中地誌」中田書店（江戸時代後期に集録、復刻版「越中實識」1973等を参照）

高岡市役所 1909 「高岡史料」（名著出版復刻版1972を参照）

〈「真龍院君御道の記」、「瑞龍開記」、「高岡町圖之辨」他〉

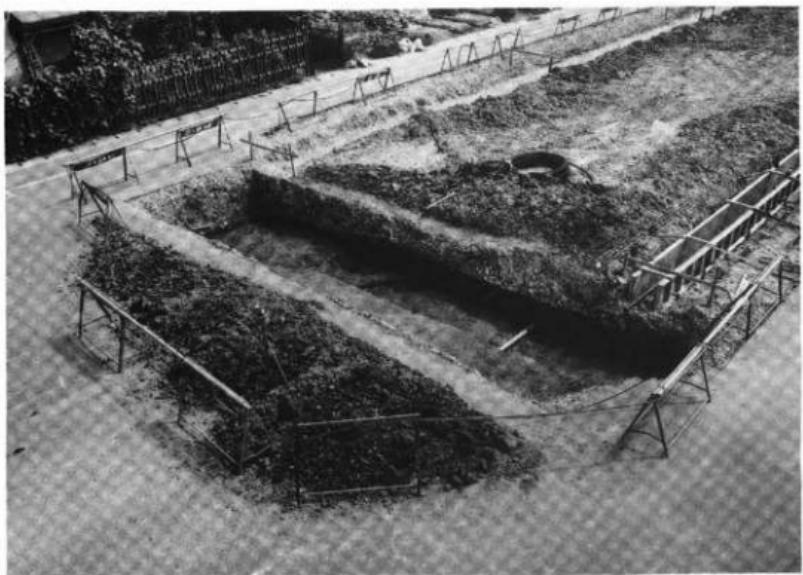
森田柿園 1951・1952 「越中志徵」富山新聞社（明治時代に編纂、復刻版1973を参照）

京田良志 1979 「高岡山瑞龍寺の草創」『日本海域の歴史と文化』日本海史編纂委員会 文献出版

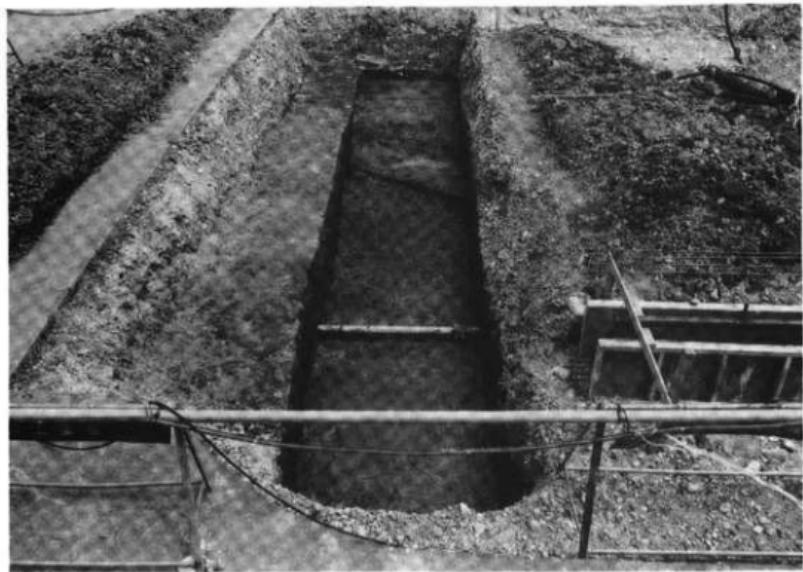
飛見丈繁 1965 「越中に実在する古い文化財」飛見丈繁刊

升井正一 1971 「高岡城の周辺と構造」『オジャラ』6 富山県立高岡工業高等学校地理歴史クラブ
・B会

四ツ谷道昭他（瑞龍寺回宝保存会・高岡市立博物館・富山新聞社）1981 「高岡山瑞龍寺」瑞龍寺刊行会
和出一郎（高岡市史編纂委員会） 1959～1969 「高岡市史」青林院新社



1. 第1地点全景（南西）



2. 第1地点全景（南）

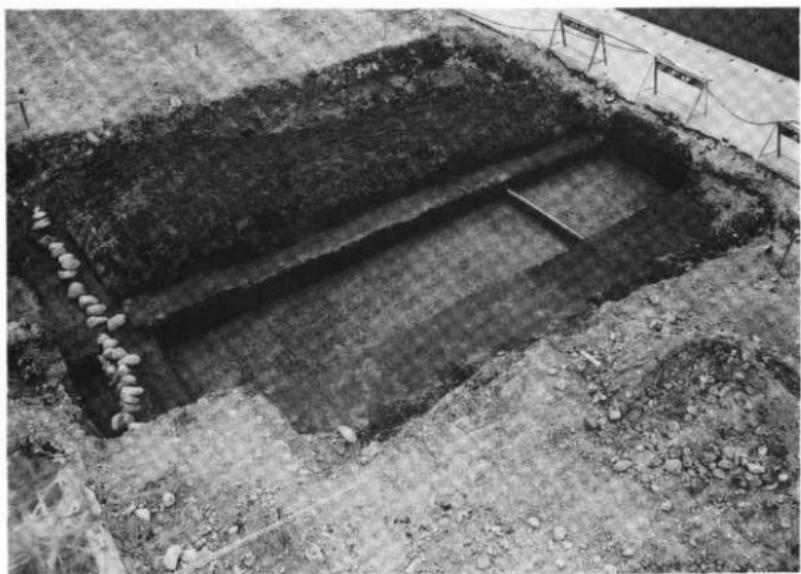
図版二
遺構



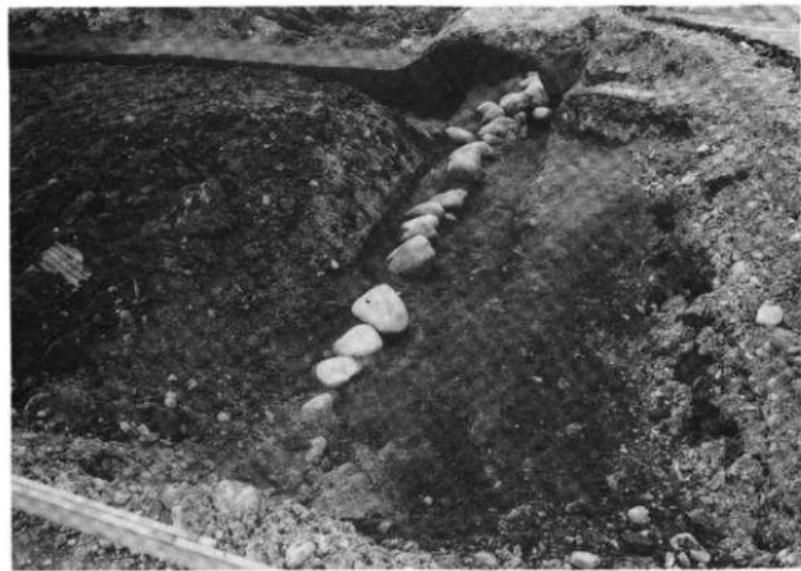
1. 第1地点南側石垣近景（北）



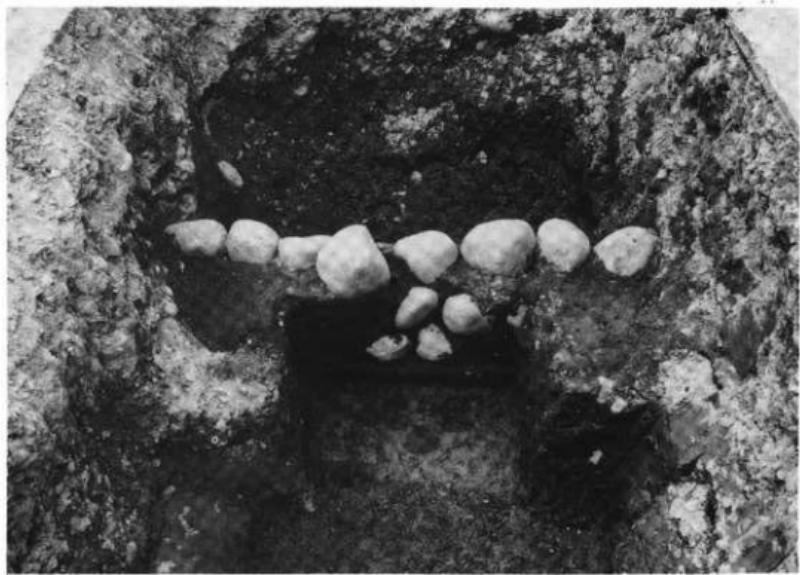
2. 第1地点南側石垣近景（北東）



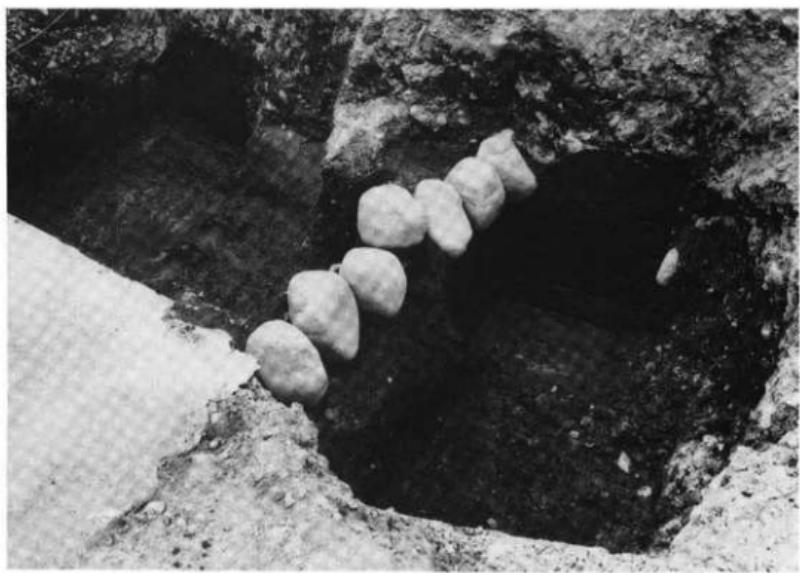
1. 第2地点全景（北西）



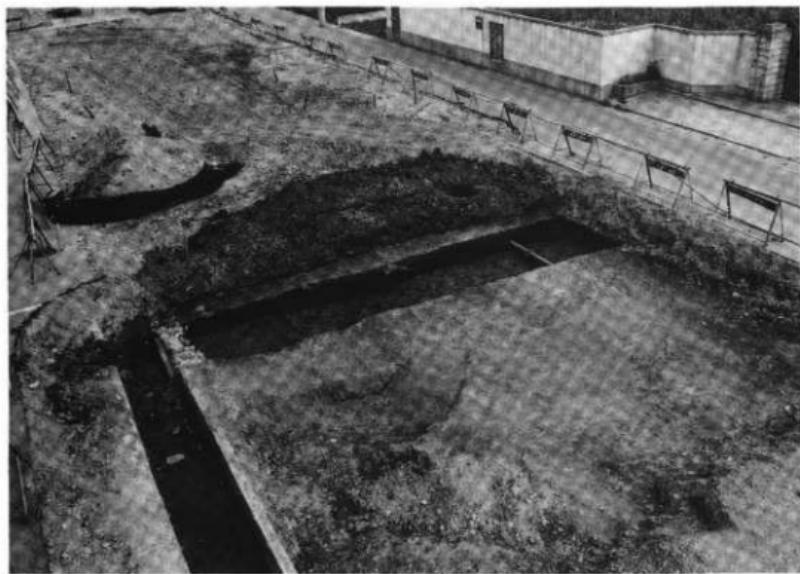
2. 第2地点北側石垣全景（北東）



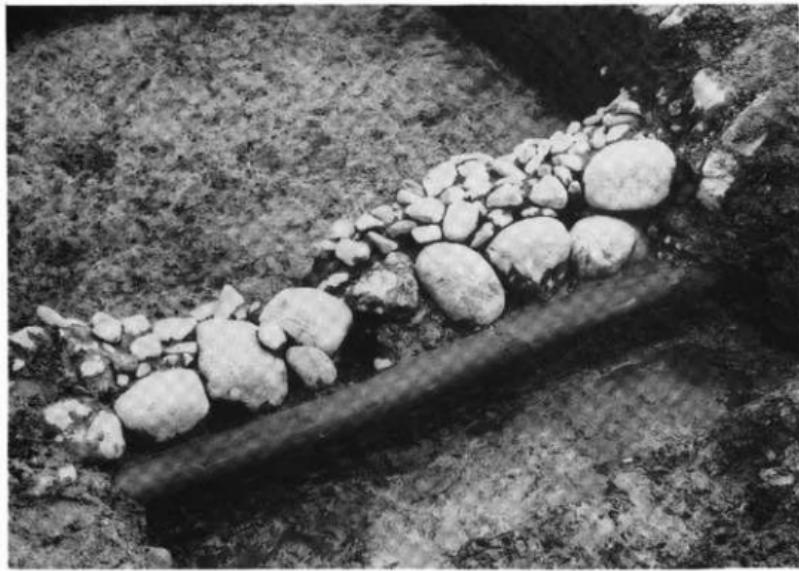
1. 第2地点南侧石垣近景（南）



2. 第2地点南侧石垣近景（北東）



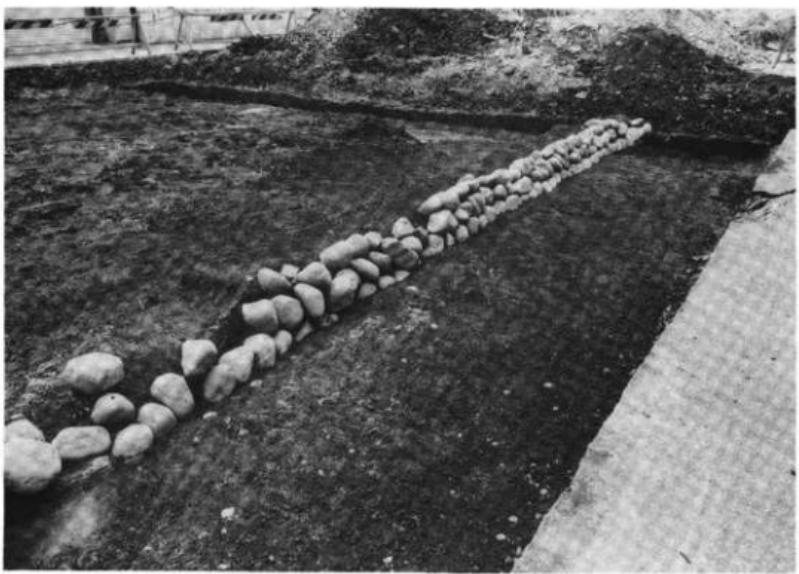
1. 第3地点全景（北西）



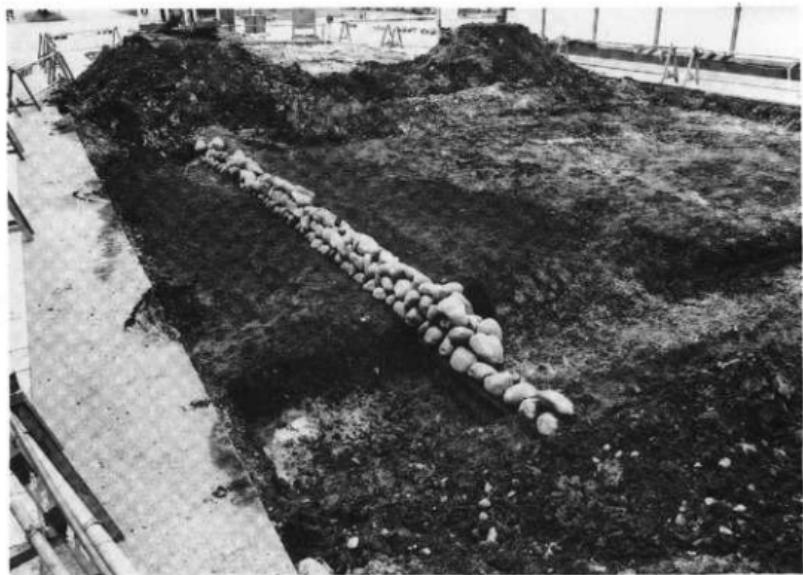
2. 第3地点北側石垣近景（北東）



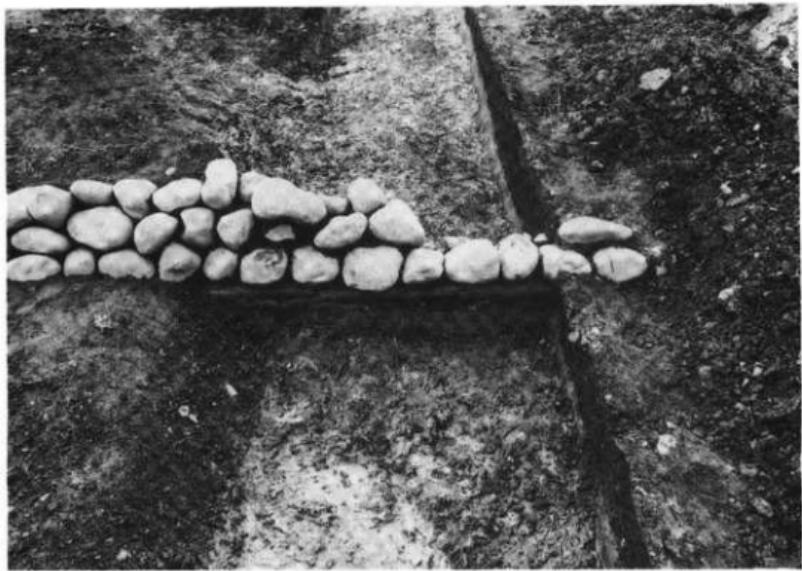
1. 第4地点全景（西）



2. 第4地点北侧石垣全景（北東）

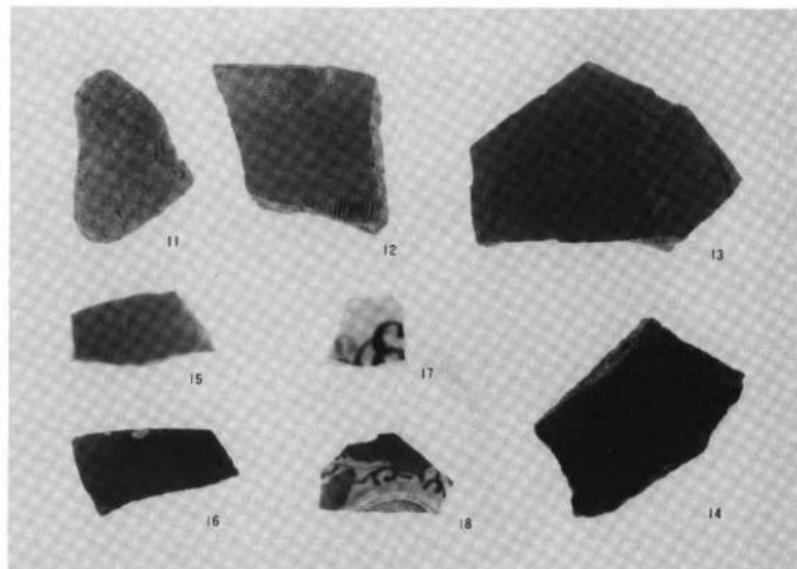


1. 第4地点北侧石垣全景（北西）

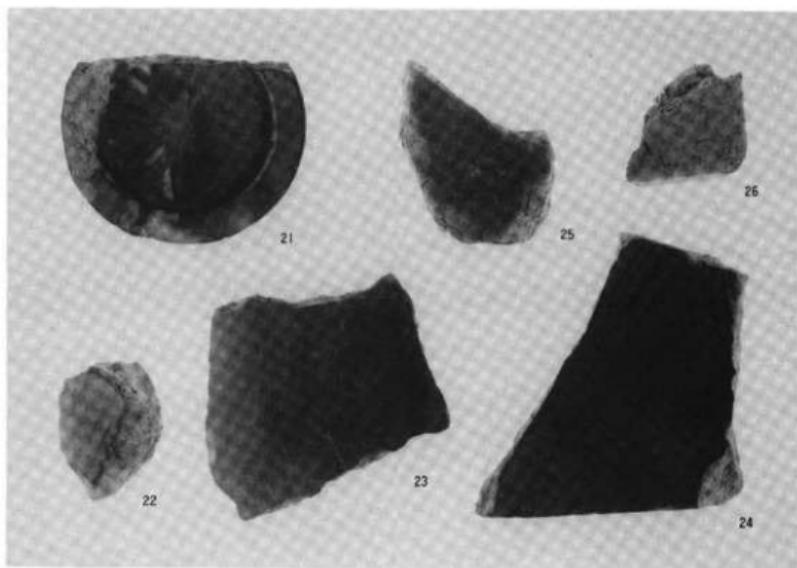


2. 第4地点北侧石垣部分近景（北）

図版八 遺物



1. 土器・陶磁器



2. 瓦

高岡市埋蔵文化財調査概報第7冊

八丁道遺跡調査概報1

1988年3月31日

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7-50

印刷所 小間印刷株式会社

富山県高岡市利屋町3

